日本近代詩歌史 上

大岡信 著

日本近代詩鑑賞 上

＊

吉田精一著作集 14

桜楓社

吉田精一著作集　第十四巻

日本近代詩鑑賞　上

昭和五十五年四月十二日　第一刷発行

定価　二四〇〇円

著者　吉田精一

発行者　及川篤二

発行所　（株）桜楓社

東京都千代田区猿楽町二―八―一三
電話東京03二九五―八七七一（代表）
振替東京六―一八〇二〇郵便番号一〇一

0392―800435―0723

© 吉田精一　一九八〇年
Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取り替え致します。

吉田精一著作集　第十四巻　目次

一 島崎藤村……7
秋風の歌 7
千曲川旅情の歌 21
椰子の実 32
二 土井晩翠……42
夕の星 42
三 与謝野鉄幹……52
春思 52
四 薄田泣菫……69
ああ大和にしあらましかば 69
望郷の歌 82
五 上田敏……90
落葉 90
六 蒲原有明……113
智慧の相者は我を見て 113

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

癡夢
茉莉花 138 126
七 石川啄木……147
飛行機 147
八 北原白秋……166
邪宗門秘曲 166
糸車 178
片恋 186
落葉松 194
九 三木露風……205
雪の上の鐘 205
現身 215
一〇 木下杢太郎……224
該里酒 224
両国 235

二　高村光太郎……245
根付の国　245
冬が来た　252
秋の祈　262
米久の晩餐　270
＊
第十四巻　日本近代詩鑑賞　上　あとがき　281
解説　三浦仁　283

日本近代詩鑑賞　上

一　島崎藤村

秋風の歌

さびしさはいつともわかぬ山里に
　尾花みだれて秋かぜぞふく

しづかにきたる秋風の
西の海より吹き起り
舞ひたちさわぐ白雲（しらくも）の
飛びて行くへも見ゆるかな

暮影（ゆふかげ）高く秋は黄の
桐の梢の琴の音に
そのおとなひを聞くときは
風のきたると知られけり

ゆふべ西風吹き落ちて
あさ秋の葉の窓に入り
あさ秋風の吹きよせて
ゆふべの鶺巣に隠る

ふりさけ見れば青山も
色はもみぢに染めかへて
霜葉をかへす秋風の
空の明鏡にあらはれぬ

清しいかなや西風の
まづ秋の葉を吹けるとき
さびしいかなや秋風の
かのもみぢ葉にきたるとき

道を伝ふる婆羅門の
西に東に散るごとく

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

吹き漂蕩す秋風に
飜翩へり行く木の葉かな

朝羽うちふる鷲鷹の
明闇天をゆくごとく
いたくも吹ける秋風の
羽に声あり力あり

見ればかしこし西風の
山の木の葉をはらふとき
悲しいかなや秋風の
秋の百葉を落すとき

人は利剣を振へども
げにかぞふればかぎりあり
舌は時世をのゝしるも
声はたちまち滅ぶめり

高くも烈し野も山も
息吹まどはす秋風よ
世をかれがれとなすまでは
吹きも休むべきけはひなし

あゝうらさびし天地の
壺の中なる秋の日や
落葉と共に飄る
風の行衛を誰か知る

「秋風の歌」は、島崎藤村の全詩中名作の名の高いものである。この詩の初出は「文学界」四十七号（明治二十九年十一月）で、その時作者は二十五歳であった。翌三十年八月、彼は新詩あって以来の画期的詩集といわれる「若菜集」を世に送ったが、この詩集はまだ暗中模索時代にあった日本の詩壇にはじめて光明を投じたもので、新体の詩の最初の収穫であった。収める所五十一篇、白眉を以て目されるのが、この作であった。

当時藤村は、仙台の東北学院の教師をしていた。それ迄の彼の人生行路は、まことに暗夜をたどるようで、漂泊の思いに虐まれ、又落魄の苦と、失恋の悩みを痛切に体験していた。彼の恋の対手は佐藤輔子（小説「春」には「勝子」となっている）、藤村が明治女学校に教鞭をとっていた時（二十五年）の生徒であった。

極めて清純なプラトニックな恋であったが、周囲の事情は相思の二人を裂くことになり、藤村は心の傷手に職をなげうち、キリスト教会の籍も抜いて、放浪の旅に出たのである。彼の愛人はいくばくもなく（二十七年）許嫁のもとにとついだが、結婚にあたりその夫に、心は藤村に捧げたものであると告白したという。翌年彼女は死んだが、或は現実の苛酷に忍び得なかった為かも知れない。一方藤村はつぶさに人生の惨苦を味いつゝ、狂熱的な若干の作品を次々に文学界によせていたが、現実の苦悩のあまりに強かった為か、名をなすに足るほどの創作もなく、すべてはいたましくもみじめな試みに終っているにすぎなかった。それが、恋人の死（二十八年）の翌二十九年、共に文学界を編んでいた親しい友人達に別れ、単身仙台に身を置くようになって、不思議にいままで渋滞していた歌口が俄かにひらけて来た。彼自ら「女性の煩ひから離れた時に出来た若い心の形見」（「新生」七十七節）と言っているが、まことに夜が明けたような気持で、次から次へと抒情詩を歌いつゞけた。

夕波くらく啼く千鳥
われは千鳥にあらねども
心の羽をうちふりて
さみしきかたにとべるかな
（略）

されば落葉と身をなして
風に吹かれて飜り

朝の黄雲にともなはれ
夜白河を越えてけり

道なき今の身なればか
われは道なき野を慕ひ
思ひ乱れてみちのくの
宮城野にまで迷ひきぬ

心の宿の宮城野よ
乱れて熱き吾身には
日蔭も薄く草枯れて
荒れたる野こそうれしけれ

ひとりさびしき吾耳は
吹く北風を琴と聴き
悲しみ深き吾目には
色彩なき石も花と見き
（略）

——草枕

この宮城野の宿に於て、彼はわずかに心身ともに落着きを得、長い長いため息をはいた。その歎息に似た深い感情を感傷的な清らかな歌ぐちに託したのが彼の詩だった。

それらの詩は「文学界」四十五号（二十九年九月）以後、五十六号に至る迄、殆んど毎号数篇乃至十篇以上もまとめて連載され、まさに消え失せようとするこの雑誌に、最後の光明を投じたのであった。「文学界」は五十八号で廃刊し、藤村も亦三十年には東北学院を去って帰京したが、「若菜集」の出版は無名の彼に一躍して当時第一の詩人の盛名をあたえたのである。この一巻のうちにもり上る青春の情熱の、純真で自由な発露は当時の青少年をどれほど驚喜せしめたことであろうか。日本の伝統的な詩歌、歌曲、散文の彩華と、西洋の諸詩人の清新な芳香とはこゝに一つに溶け合って、若い日本の浪漫精神の、優しくも又華やかな開花を見せたのである。藤村はのちにこのころの詩壇や彼の詩作状況を追憶して言っている。

遂に、新しき詩歌の時は来りぬ。そはうつくしき曙のごとくなりき。あるものは古の予言者の如く叫び、あるものは西の詩人のごとくに呼ばはり、いづれも光明と新声と空想とに酔へるが如くなりき。うらわかき想像は長き眠りより覚めて、民俗の言葉を飾れり。伝統はふたゝびよみがへりぬ。自然はふたゝび新しき色をおびぬ。光明はまのあたりなる生と死とを照せり。過去の壮大と衰頽とを照せり。新しきうたびとの群の多くは、たゞ穏実なる青年なりき。その芸術は幼稚なりき、不完全なりき、されどまた偽りも飾りもなかりき。青春のいのちはかれらの口唇にあふれ、感激の涙は彼らの頬をつたひしなり。こゝろみに思へ、清新横溢なる思潮は幾多の青年をして殆んど寝食を忘れしめたるを。また思へ、近代の悲哀と煩悶とは幾多の青年をして狂せしめたるを。（略）

「若菜集」は実に「民俗の言葉」を以って「清新横溢なる思潮」と、「近代の悲哀と煩悶と」を「西の詩人

のごとくに呼ばはり」うらわかき「青春のいのち」を「感激の涙」と共に狂うようにうち出したものであった。そこには孤独の思いにあふれ、純情のあわれに火と燃えた恋愛詩が多かったが、それは又当代青春のやむことなき心情、歌おうとして歌いかねている新しい感情を、素朴に単純に歌い出したものに外ならなかった。

藤村の詩は詩感の不統一と措辞の彫琢不足により、冗長散漫の弊を免れないものが多く、当時の批評家から繊弱にして朦朧というような評をうけた。純一な感情の思いせまった高調は、一句もしくは一章に輝いているけれども、一篇としては形式の整った均斉美に乏しい傾きがあった。その内でこゝにあげた「秋風の歌」は、彼の情熱と殉情を見るには最も適当なものといえないけれども、措辞に難が少く、詩想、格律ともに正を踏んで、詩感も亦ほゞ醇一である。その意味では後年の「千曲川旅情の歌」と共に、代表作の一をなすものであろう。

さてこの「秋風の歌」の製作動機にヒントをあたえた作品として、有名な英国の詩人シェリイ(P. B. Shelly 一七九二―一八二二)の「西風の賦」Ode to west wind をあげることが出来る。この詩はシェリイの代表的な傑作の一であり、同時に又英国浪漫主義文学の一代表作であって、「文学界」同人は何れも愛唱して止まなかった。「文学界」三十一号の見返しにはこの詩を録しているほどである。批評家によって叙事詩的に壮大なる抒情詩といわれる西風の賦は、

O wild west wind, thou breath of Autumn's being,
Thou from whose unseen presence the leaves dead
Are driven, like ghosts from an enchanter fleeing.

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com